

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18530425

研究課題名（和文） 共同性を留保した愛着・しない愛着—‘自発的’居住地選択における地域イメージの位置

研究課題名（英文） Attachment to 'Place' Free from 'Community' or Coming from 'Community'

研究代表者

菅 康弘

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：40226410

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学（3801）

キーワード：沖縄、愛着、I ターン移住、風景、地域イメージ、住、旅、ストレンジャー

1. 研究計画の概要

これまで無前提に結びつけられていた地域的共同性と‘場所’への愛着の相互関係をいったん留保した上で、下記の2つの視点から、愛着と共同性との関係を再検討する。

(1)琉球地域のIターン移住者への聴き取り調査を中心に、既存の共同性から独立した形の「場所への愛着」と、愛着形成過程に関連する地域イメージ・地域表象を、内面化されている風景との相互作用から研究する。

(2)同時に、近代日本の流行歌の言説分析を通して、「故郷」「居住地」から(1)を考察する。

2. 研究の進捗状況

1. (2)については2009年の論考において故郷への「語り」と「唄い」の側面から、最初の分析が始まっている。まず成田龍一『「故郷」という物語—都市空間の歴史学』（1998）を参考に、‘場所’への愛着が成立するためにはパターン化・抽象化という外在化・客体化のプロセスが不可欠であることが論じられ、次に‘真珠化’（見田宗介『近代日本の心情の歴史』、1967[1978]）という概念を手がかりに、‘場所’への愛着が真や善に加え、美という側面を有する過程で一定の共同性として聖化する点を分析した。現在執筆中の次稿においては、1970年代以降の流行歌を‘順接と逆接’という関係性から‘場所’への愛着の生成過程、愛着と共同性との間を考察している。なお、2007年の論考ではこの一部を先取りした形で論を展開している。

1. (1)については、これまで22名のIターン移住者と6名の行政担当者・地域のキーパーソンに聴き取り調査を実施した。現在は

これらの内容を入力し、でき上がったものから順次、ファースト・コンタクトのきっかけとなった雑誌記事での語りと比較検討している。ちなみに、2006年度・2007年度9月分の聴き取りの一部は2007年の論考に反映されている。

こうした作業と並行し、Iターン移住者の動機形成過程において重要な役割を果たしたものを、風景/人間/生業/環境という4つの側面から分類し、特に風景という内面表象と撮影された画像とを比較しながら、動機形成における「共同性を留保した愛着」「自律的表象としての場所イメージ」を検討している。

3. 現在までの達成度 →③

1. (2)については手薄だった70・80年代の音楽資料も揃い、また理論的フレームワークも整ったので見通しは立っている。

しかし1. (1)に関しては難航している。理由としては、まず聴き取り調査を選択するための雑誌記事データの入力を依頼しているアルバイトが就職活動のため思うように仕事はかどらなかったこと、そして申請者自身が昨年亡くなった父の付き添いのため、研究期間の最初の2年間当初予定した回数の調査に赴けなかったことがある。

そして、これまで調査した対象者のボキャブラリーと申請者の研究の意図とが大きく異なるものが多く、その「翻訳」に手間取っていることも大きな理由である。すなわち、調査対象者は共同性と愛着とを無前提に結びつける伝統的な言語体系に無意識のうちに依存していることが多く、こちら側の意図が大きく誤解されている場合が多い。したが

って現段階では「使えるデータ」が少ないという事情があり、さまざまなアプローチで補足可能なデータを探している状況である。

[学会発表] (計 0 件)

4. 今後の研究の推進方策

[図書] (計 0 件)

1. (2)については今年度中にまとまった成果をあげられる予定である。戦前から戦後、そして今世紀までの流行歌での唄いを手がかりに、大衆文化における‘場所’への愛着と地域共同性との相関をまとめたいと考えている。

[産業財産権]
○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

1. (1)については、幸い、雑誌記事ばかりでなく、聴き取り対象者自身の手による書籍・ホームページ・ブログなどでの語が多い。したがって、これらのメディアでの語り口と聴き取り調査の内容とを照らし合わせながら分析を進めていき、同時に撮影された画像(かれら自身の口から発せられた風景を撮影している)との組み合わせで、内面化された風景表象と、愛着と共同性をめぐるさまざまな語りとの相互作用を分析する予定である。

[その他]

この点で、昨年調査で‘場所’への愛着を考える上で興味深い人物(宮古島在住)の存在を聞いた。本年9月に訪問を予定している(調査補助員の謝金を計上している)。申請者自身は大学の研究出張旅費で調査を実施)。また、2006年度・2007年度に訪問した本部町の調査対象者に、できれば11月の学園祭期間中に再訪したいと考えている(研究出張旅費の残額+私費)。彼は自己が選んだ本部という地域に独特の感情を抱いており、移住者間や地域のネイティブとの間に独自のネットワークを築いているキーパーソンである。こうした意味で、2人の移住者に聴き取りを実施することは、場所—愛着—共同性を考察する上で、多大な成果が得られるのではないかと期待するものである。

以上2つのアプローチから、地域イメージと居住地選択からみた共同性と愛着との間を、当初の予定通り分析しまとめてみたいと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

菅康弘「よそ者であることを<選択>する—居住地選択と愛着の位相」甲南大学紀要(文学篇) 146号 2007年 査読無し

菅康弘「‘場所’への愛着—語り、唄う、固着と乖離—」甲南大学紀要(文学篇) 156号 2009年 査読無し